

※国土に占める森林面積。国連食料農業機関 (FAO)によると、日本の森林率は68.2%。



絵画コンクールでは、子どもたちが「森」をテーマに思いの絵を描く

未来への力、「子供の森」

森林資源の再生や保全は、世代を超えて取り組んでいかなければならない重要な課題。JICAの円借款の支援によりインドで実施している「ハリヤナ州森林資源管理・貧困削減事業」では、財団法人オイスカとの連携を通じて、緑を育て維持していく活動が、広く、深く広がっている。

率は全国平均の5分の1。森林に依存して暮らす人々の生活も、緑の減少とともに厳しさを増している。そこで2004年、JICAはインド政府の要請を受け、「ハリヤナ州森林資源管理・貧困削減事業」に対し、円借款による支援をスタート。ハリヤナ州の800の村落を対象に、森林を再生し、同時に人々の生活水準を改善していく取り組みを実施している。

豊かな森は、人々の暮らしにも、そして地域の環境にも、深いかわりを持っていて。森林の消滅は、森で獲れる燃料や飼料、果実などの減少を意味する。きれいな水を提供してくれる水源も森にある。森林は生活に密接に関係しているだけに、地域の人々の協力がなければ再生は難しい。多くの住民が参加する植林は、合計すると約5万ヘクタールにも及ぶ広大なエリアで行われている。東京23区の約80%に相当する面積だ。また、森林の大切さを理解してもらうため、州の森林局職員や地域住民を対象にセミナーを開催したり、住民による非計画的な森林伐採を避けるため、代替収入を得ることを目的とした職業訓練も行う。円借款の供与額は62億8000万円。まさに地域が一体となっ

地域の人々がつくる 新しい森

インドの森林率は約22%と、世界平均(約30%)を下回っている。近年は、人口や家畜の増加、都市化・工業化による急激な経済成長が、森林率の低下に拍車をかける。中でも、首都デリーに隣接するハリヤナ州の森林

ド2地区にある400の学校で進められている。推進役は、アジア・太平洋地域を中心に農村開発や環境保全活動を展開している財団法人オイスカ。1991年から「子供の森」計画を独自に行っており、今では、26の国・地域で4000校近くが参加するまでに広がった。

「木を育てる楽しさや面白さを子どもたちに実感してもらうため、成長が早く、実をつける果樹系のものを選んでいきます。その話するのは、オイスカの国際協力部課長・林洋史さん。「子どもたちが苗木を植え、水をやり、育てていくことが一番大切です」。

今回のプロジェクトでは、一校当たり年間50〜100本の苗木を、家庭や学校周辺に植えていく。そのほかにも、オイスカの現地スタッフによる環境に関する授業や、自然をテーマにした絵画コンクールやスピーチコンテスト、自然公園でのネイチャーツアーなども行う。指導するのは、トレーニングを受けた学校の先生たちだ。

そして今回、計画を進める中で画期的な成果が生まれた。「子供の森」計画活動ハンドブック(英語版・ヒンディー語版)の作成だ。木の植え方や環境教育の手法など、実際に指導する先生たちの意見が多く取り入れられ、インドオリジナルのハンドブックになっている。インドの文化や気候、樹種を踏まえた、極めて具体的な実践マニュアルだ。

「私たちNGOは常に現場において、現場のニーズに敏感です。当初予定されていたような実践が、現場でうまくいかなかったハンドブックの作成も、インド独自のマニュアルが必要だという先生たちの要望から始まりました。このような地域の

オイスカの現地コーディネーターから森林の大切さについて学ぶ



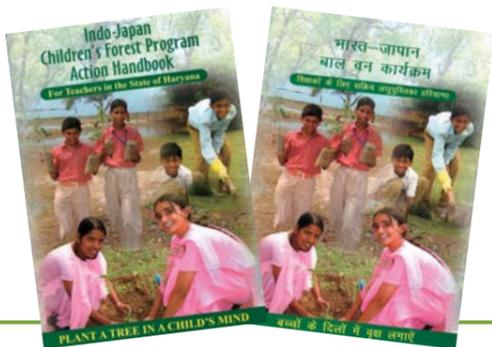
from インド
INDIA

インドのニーズを踏まえた 森づくりハンドブック

「子供の森」計画は、ハリヤナ州のグルガオン、ファリダバ



(上)校内で苗木を植える子どもたち
(下)オイスカのスタッフと「子供の森」計画参加校の担当者は、定期的にミーティングを行い、活動の進捗を報告し合う



森づくりハンドブックの
英語版とヒンディー語版